八切止夫自由全集

八切止夫

織田信長愛脫事件

織田信長受胎事件

八切戦国史 ③

検印

価 六八〇円

著作者 八切止夫

昭和四十八年一月五日 印刷

昭和四十八年一月十日 発行

発行者 山田 孝

印刷 株式会社堀内印刷所

製本 大日本製本株式会社

発行所 東京都中央区日本橋蠣殻町二ノ二〇
日本シェルター(株)内
〒103 日本シェル出版 ☎(六六六)九九一二

振替東京一一二二三一(六六八)一九七四

0093-730111-6169

八切止夫

織田信長受胎事件

――〈信長の過去は暗かった……〉――

織田系図……4
白い陽……5
信長生まれる……26
「さぶ」と蠅……46
赤児もなく……66
大脱走……85
尾張独立……104
筒針部族……114

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

カバー　柳　柊二
イラスト　栗原美代

小豆坂合戦……132
雨は無情……150
「吉法師」と改名……167
燃えて火となれ……185
斉藤道三出陣……204
愛とは死か……222
天文ふうてん……241
信長武者修業……259

織田系図

近江八田別所織田ノ庄より尾張へ移り、勝幡織田は敏定の子信定から有名になり、その子信資が織田信長の祖父となるが、信資を抜かして信定を織田信秀の父とする異説もある。

織田孫十信資

- 孫一信秀
  のち織田弾正弼信秀
  天文二十年三月三日急死す
  - 一郎信常
    美濃に討死
  - 二郎信広
    「安祥城代にて今川に捕われ「三三五郎」と改名し、のち美濃にそそのかされ叛かんとして女婿丹羽長秀に密告される。天正十年六月二日爆死。
  - 三郎信長
  - 四郎信行
    土田久安の援助にて弘治二年謀叛、翌年殺される。この遺児が後の津田信澄
  - 五郎信包
    のち三十郎上野介とよび、その娘を秀吉の側室にあぐ
  - 喜六信介
    竜泉寺松川にて溺死
  - 六郎信治
    喜六の死後、六郎を名のり、のち信秀と称して秀吉に仕え「三吉侍従」として一万石程度
  - 彦七信与
    一向門徒に攻められて、長島川へ落ちて戦死
  - 八郎信時
    犬山城代をつとめ、家臣に殺害される。
  - 九郎信貞
    秀吉に仕え「秀孝」と名を変え、関ガ原合戦後は浪人となる。
  - 十郎秀成
    前名長好、秀吉に仕え、慶長十四年七月歿。
  - 十一郎長益
    東京銀座の有楽町は彼「有楽斎長益」の邸跡。
- 与二郎信康
  美濃蛭海が原討死
- 孫三郎信光
  のち守山城主となるも信長に謀られて毒害される。
- 四郎次郎信実
  上総の香取郡小見川の織幡へ出奔、行方不明となる。
- 孫五郎信次
  造酒丞の別名あり、犬山の木下城の城代

〈責任作成・八切止夫〉

白い陽

女というものは、心が生まれつき優しくできているのか。それとも神経がかぼそくできているのか。あまり考えこむと、しまいには何も判らなくなるものらしい。そして、ぼんやりしてしまうようだ。

平手監物政秀の娘八重も、何故家をとびだして出てきたかは、ろくに覚えていないが、とうとう巡見街道の五軒家にまできていた。

すると、

「ブイウン」「ビュウン」矢がきた。

「ビシン」「ボイン」と小石がとんだ。

つぶて打ちといって、まず初手にやる石投げ。飛び道具の合戦始めである。

「ウオッ」と喚きをあげ、槍の穂先をつきだした武者が駈けだしてきた。とんだ所へ来てしまったと八重も、さすがに、
「はっ」とした。正気づいたのである。そこで狼狽しながら叢へ隠れた。
すると、その横を、つむじ風のように足軽や、武者の一団が走り抜けていった。
「ぷうーん」と熟柿を醱酵させたような臭みが、萱草の葉末に引っかかって残った。
その酒の香をかぎながら、八重は、
「戦なんじゃ」と、おびえたようにきっとした。正気づいたつもりでも、まだ朦朧としていた頭の芯が、ようやくしゃっきりしてきた。
それゆえ身体は小さくまるめていたが、耳だけは野兎みたいに、ぴんとたったようだ。
しかし貧血したような蒼ざめた顔で、とんでもない所へ、まぎれこんできたもの。どないしたら良かろと胸を震わせ、家を抜け出てきたのを後悔しきっていた。
(なぜ、兄嫁と口喧嘩をしたのか)そしてそんなことを、おぼろげに想いだし、
(なにも私が云合いしたからと横合いから、兄までが向こうの肩もって、この私を叱ることもあるまいに)
と、口惜しがった。また、しゃくにさわって肚がたってきた。だから、いまいましさに、また泣こうかと思ったとき、どちら側か判らないが、「ワアッ」「ワアッ」と大声が聴こえた。
鯨波、ときの声である。勝ちどきの、どよめきが風に流れて耳へ入ってきた。
「矢合わせだけで、戦は済んでしまったらしい」と八重は、ごくんと息を呑んだ。

（たいした戦でなくて、まあ災難をうけずに済んで良かった）と、ほっとした。が、

「矢拾いがくるかも知れん」と、八重は、どきりとした。心配になった。

――いまの時代でも水鳥の羽根をつけ矢尻のついたのは稽古矢でも一本、六、七百円する。当時でも一本が米二升、粟なら八升の値打ちである。そんな値打ちの物を放っておく筈はない。ゴルフ場からとんでくるボール拾いのように、戦が済めば、落ちた矢を近在の者が探しにくるのが、この時代の慣わしだったからである。

もちろん拾うのは矢だけではない。

倒れている者が居れば、息の根をとめて、身ぐるみ一切をはがして持ちさる。

女でもいようものなら、どんな目に逢わされるか、判ったものではない。だから、

「愚図々々していては……」

と八重は萱の根株の茂みを両手でかき分けながら、丘の方へ逃げようとした。

が、もぞもぞ動いてゆくと、かさこそと音がした。そこで、自分がひっかかってなる草の葉ずれとばかり、初めの内は八重も思った。

なにしろ、音が平行して、すぐ耳の裏から聴こえてくるせいだった。処が、

「……はて」と、どうもすこし気になってきた八重は首を傾け自分は止まってみた。しかし、八重の背後から響いてくる音は、こちらに調子を合わせず、やはり聴こえてくるのである。

（山彦というのは声をかけ、しばらくしてから耳へ戻ってくるというが、まさか萱の草っ原で、山彦ということもあるまい）そう想うと、八重は恐ろしくなってきた。

「キエイッ」と悲鳴をあげ、せっかく四つ這いになって隠していた身体を、びっくり箱のように、ぽおんと外へ弾きだした。

まあ早くいえば、驚いて飛び上がったのだ。だから、その声に面喰らわされたのか、

「ヒエッ」「オウッ」

と、あちらこちらから、声のはねっ返りがきた。ぽこんぽこんと水の泡が浮きだすように、髯つらの男の貌が草の間から次々ともち上がってきた。

そして、ぎらぎらした陽ざしに、汗をてかてか輝かせ、さながら喘ぐように、

「……女じゃ」うわずった声を出したり、

「まんだ、若い娘じゃぞえ」と語尾を震わせながら叫んだ。

どの男も野良犬みたいに唇を、ぽかっとあけ、涎か汗を筋をひかせ顎からたらしていた。

八重は、その男共の眼に、獣のような光をみて、すっかり脅えてしまった。

(どの方角へ逃げだしたら良いものか)と、きっとして周囲を見渡したところ巽の方角にだけは、蕨しべで頭の髪を結えた熊のような男どもはいなかった。

だから走った。息もつかずに両手を泳がせるよう草の葉末をかきわけ駆けた。

もう、ひとっ走りで萱原の中を抜けられそうだと思った。が、そのとき、

「あッ……」足をとられて八重は転倒した。ひっくり返しに、仰向けにされてしまった。

眩しい七月の陽ざしが、もろに当たった。眼蓋をとじると八重の薄い瞼皮を通し抜けて桃色に、いや朱色に陽は燃えた。起きようにも両手と両脚が動かない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（姿を匿していたやつに、うっかり突きあたり、はずみで転げたところを、後ろを追い縋ってきた奴らに、よってたかって押えつけられている）とは判ってきた。

だが、事態が呑めこみてきたからといって、もう何んの手の施しようもない。

宛らまるで亀がひっくり返され、手足をばたつかせている恰好なのだ。

（しかし亀なら、はずみに起き上がれるかも知れないが、なにしろ私は手や足もとを締めつけられているのだ……なんともならない）

ただ怨めしげに八重は、のたうち廻った。

しかし、声を出そうにも、まだ土のついた萱の葉茎を、まるめて口の中へ捻じこまれ、その上から莚をかぶせられ、いくら首をふっても、何も視えない。

が、それでも、八重は身もだえして、なにくそとばかり暴れようとした。

とはいえ、どうなるものでもない。

「う」「うう」と、八重は咽喉の奥へ、唾と共に流れこむ泥の味にむせながら、声にならぬ声で悲鳴をあげた。哭くまいとしたが口惜しさに泪が噴きあげた。

莚の編目から青臭い草の匂いと、ぎらついた陽がチカチカ射こまれてきた。

身体の骨がばらばらになったように腕も肢も痺れきっていた。ものうい倦怠に息さえも止まりそうだった。が、やっと手先が自由になると口の中へ押しこまれていた青草をつかみ出した。

「べっべ」と白い太陽を睨みながら、莚をはねのけざま、唾をはきかけた。いがらっぽくて、咽

喉の奥まで泥が詰まっている感じたった。烈しい吐き気がしてきた。
八重は指を咽喉につきこむと、首をまげて、げえっと吐いた。すると、土が融けたのか、黒ずんだ酢っぱいものが唇の端から、だらだらと吐瀉し流れ出た。しかし、八重は嘔吐しながらも、
（こんなことで、女がへこたれてなるもんか）と鞭うつように自分を励ました。
そこで、顔をあげるなり、きっとして、
「おのれら、この私を平手政秀の娘と知っての乱妨か……平手一族は郎党ともで百名は越す豪族ぞ……帰ったら云いつけてやって、仇をとってやる……おのれらはぶらさげられて、首吊りの木に下げられるんじゃ……今に見とれや」
まだ地面に背をはりつけたまま、はったとばかり睨みつけ、大声で喚きたてた。
「……えっ、平手の娘だったのか」と後悔したような物おじした声がしてきた。
なにしろ平手一族というのは、天白川をこした鳴海、有松の背後にある、小坂から徳重にかけ、二千貫の土地をもつ斯波管領家直臣の家柄である。郎党は百でも、戦ともなれば何百もの軍勢を率いて出陣する、この尾張きっての豪族である。だから汗をふきふき、
「勘弁してもらえんだろうか」と、さっきの勢いはどこへやら、男どもは詫びを入れてきた。
「ならぬ。もとにして、まや（弁償）せ」大の字にひっくり返ったまま、八重は股ぐらを指さし、しょぼくれた男共を睨みすえた。
（こんな塵芥みたいな男に、手ごめにされたとあっては、おめおめ平手の家へ戻れるものか）と、息まき、そこで荒された個所をめくりあげて、

（かくなる上は、いっそ殺したければ、息の根を止めてくれたらええぞな）とばかり、やぶれかぶれの気持ちにさえなっていたのである。

達磨のような男共は、ぐったりしたような疲れきった顔で、ぼそぼそ何か相談していた。陽は、まだ照りつけたままで、あたりの踏みにじられた萱草の裂け目からは、漂うごとく青い匂いがむんむんしきっていた。

八重は眼をつむっていたが、それは眩しいせいばかりではない。後難を怖れた五人の男が、今にもとびかかってきて首を締めにくると思ったからである。覚悟をつけてじっとしていたのだ。

というのも、惜しいと思う命でもなかったからである。

なにしろ長男の監物汎秀のところへ、甚目寺在からきた嫁が、とても気性の烈しい女で八重に対していつも口やかましく文句ばかりいう。

本来ならば、八重は小姑の立ち場なのだから話はあべこべの筈だが、いかんせん母が前になくなっているから、きた兄嫁が主婦となって家中の束ねをしている。だから八重は召使いの小女同様にこき使われている。

が、それはよいとして、他家から縁づいてきた立ち場で、古くからの奉公女共には遠慮気兼ねをするのか兄嫁は、そちらには、あまり文句をいわずに何でも彼でも箸のあげおろしにまで、「なんね、それ」と、わざと奉公女に聴こえよがしに、八重にはいつも文句ばかりいう。

八重は内心面白くないが立場を考え、なにを云われても我慢している。聞き流しにして、「へえ」「へえ」とか「はあい」とはいっている。だが月に一度ぐらいは、やはり虫の居所が悪

いと、かっかときてしまう。黙っていようと肚では想うのだが、つい口がひとりでに開いて、
「口やかましゅう、なんね、こんな事」
とやってしまう。すると兄嫁は口惜しがって告げ口を兄にする。するとである。その兄が、なんための兄妹なのかと思う位の権幕で、すぐ戦場みたいな胴羅声をはりあげ、女ご部屋に向かって、憎々しくげに、
「こらッ八重」とよびつけておいて、実の妹なのに、
「なんで奉公女の前で、俺が嫁女に恥をかかせてくれた」と、こうである。
初めの内は、それに対して、子供の頃からの馴れで、つい、あれこれ云いもしたが、そうすると兄嫁のてまえ、良いところを見せたいのか、さざえのような拳固が、ごきんと飛んでくる。痛い。だから口答えなど、しないようにしていたが今日は、つい、しゃくにさわって、
「なんで、他所からいりやあた女ごの味方ばかり、いつもするのん」と、つい、むしゃくしゃして突きかかってしまった。
すると続けて叩かれ打擲されてから、
「何処へなりと、うぬのごときは出て失せろ」とやられた。面白くもない。そこで八重は、
（ええ、生きとっても詰まらん。死んでこまそ）と思った。かっかとしたから、
「ええ出てったる。退んだるで……」と飛び出した。天白川までいった。
だが、川のそば迄行ったからとて、それですぐ死んでしまえるというものではない。
水は向こうで身体は此方である。一緒にさせるにはドボオンと飛びこまねばならぬ。が深い水

の流れに身を躍らせるのは、そう思っていたようにたやすいことではない。それに在所の近くの川で土左衛門で浮き上がるのも、あまり良い恰好ではない。そこで場所変えしようと、庄内川まで行った。しかしそこは川幅が広くて岸辺の水深は浅かった。

だからドボオンとやりかねて、仕方なく、また、てくてく日光川へと木曽川のてまえの支流へゆく途中、この五軒家の萱原で、戦騒ぎにまきこまれ、あげくのはてが、とんだ目にあい災難にあったのである。

だが、しょせんは死ぬ覚悟で、とびだしてきた身である。そこで、

「なに未練があろう」とばかり八重はふんぞり返り、殺さば殺せと大の字になっていた、

「……まこと、平手党の娘か」

首をしめにくる換りに、そんな声がした。すこし、きんきんした声である。

だから八重は、はっとして、固く瞑っていた両眼を見ひらいた。しかし、

「あッ」と、口の中で声をたてた。今しがた乱妨をした髯だらけの、むさくるしい男とはこと違い、色白なすんなりした若い男なのである。

着ている物も、こざっぱりとして、肩に打ち太刀を背負っていた。柄にはまった銀かぶせが、ピカッピカッと稲妻みたいに光った。

（こりゃ……ええ男じゃのう）途端に十六の八重は、顔が熱病やみのように、ほてってきた。

（このひとも、ここにいるからには、代わりばんこに悪るさしんさった一人じゃろか……こない、

ええ男になら何をされたとて、こちゃ、いとやせぬもんなあ……）そんなことをまず想った。だから、聞いてみようかとも考えた。

なにしろ莚を頭から冠せられていたから、八重には、次々と誰やら見当もつきかねていたせいである。が、声をかける前になって、何気なく手をのばした八重は、はっとした。

なにしろ裾が、べろんと左右とも臍のあたりまで、まだめくれっ放しだったからである。

寒い時なら風にも当たるから気づく筈だが、やけつくような陽ざしである。開けっぱなしの儘の方が、風通しもよいものだから、つい拡げられたきりなのをてんで知らずだった。まあ頭の方はどうにか冴えてきたが、腰の方はまだ痺れきって感覚が麻痺していた為、てんで意識できなかったのかも知れない。

八重は、周章狼狽。くるっと横向きに身体をねじると、海老（えび）みたいに蹲（うず）くまってしまった。恥ずかしさに顔もあげられなかった。穴があったら自分の方が入りこみたい心境だった。

だから、しくしくと声をたて泣いたところ、

「これ、これ」と、きんきんした声は近よってくるなり、優しく背をなぜだした。そして、

「泣くな」とやさしくいってくれた。

「うん」うなずいて、八重は、しゃくりをしてから、泣くのを止めた。なにしろ、

（こんな、良い男の云うことをきかない訳けには、ゆかぬ）と思ったからだ。

「……天白川向こうの平手政秀の娘……というたが、それに相違はないのか」

聞かれたから、素直に、こくんと頷きもした。しかし、八重はすぐその後から、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com